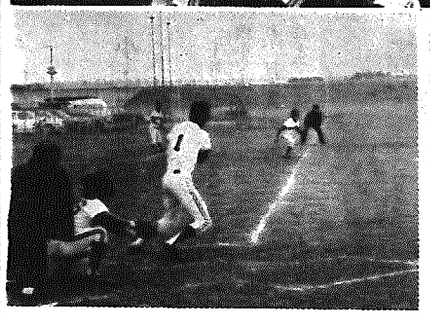
（第三種郵便物認可）



▲喜びにわく選手
白井監督を胴上げ
◀逆点打を放つ青木選手

大野町商工会悲願達成

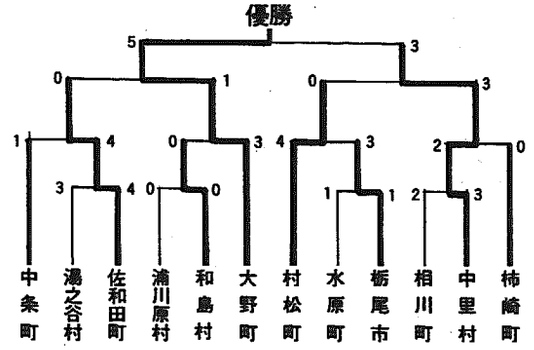
決勝で中里村を下し優勝

〔商工青年部野球県大会〕

県下商工会青年部野球大会が、商工会法制化二十周年を記念して、今回は例年より多い、十二チームが参加して、十月六日、町営野球場でトーナメント方式で行われ、大野町商工会が決勝戦で中里村を逆転で下し、初優勝をかざりました。

試合経過

第一回線は、昨年の覇者浦川原村と〇対〇の末、ジャンケンで勝ち上って来た和島村との対戦。これを三対〇のシャットアウトで下し、準決勝へ。準決勝は一回表で得点した一点をうまい継投策で、佐和田町につけ入るスキを与えず待望の決勝戦へ。先攻の中里村は一回表昼上に走者二人を置き、右翼へ、スリーランホーマーを放ち、三対〇とリード。しかし、四回裏敵失に乗じ、高率のよい安打をかみ合わせ四点を取り逆点に成功。さらに五回裏ダメ押しの一点を追加五回表から投手を丸山から青木にスイッチ。相手打線を一安打に押え、永年の悲願であった優勝旗を手中にし、春から続いてきた長い大会に終止符を打ちました。



町民釣り大会終る

一般の部　敬称略
一位　鈴木克太郎（奥野）五一〇g
二位　丸山武行（柳作）五一〇g
三位　丸山寅松（黒鳥）四九〇g
大物賞
前田和雄（大野）二四・五㌢
学生の部
一位　飯原　保（板井）四五〇g
二位　阿部　豊（善久）三八〇g
三位　鷲尾　徹（大野）三六〇g
大物賞
飯原　保（板井）二五九㌢
ゲテ物賞
鈴木仁平次（大野）ナマズ
鯉賞
横木広一（川原）

どうですこの若さ

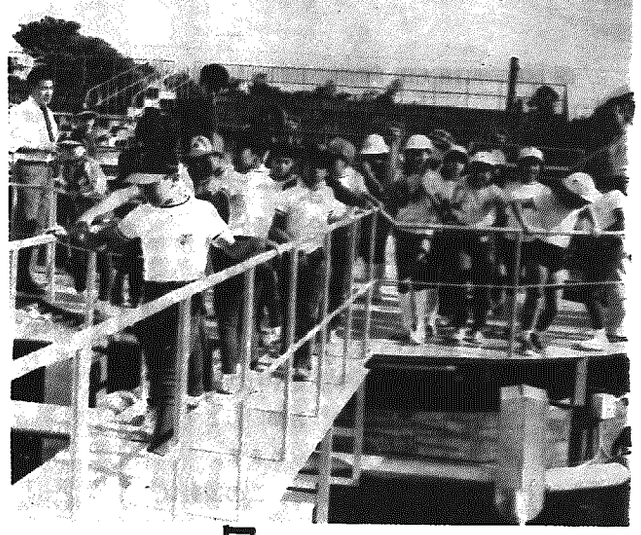
郡老人スポーツ大会開く

十月三日、町総合体育館で、西蒲原郡内のお年寄り、一千人が一堂に会し、第八回スポーツ大会が盛大に繰り広げられました。

この大会は、老人の心身の健康保持と、積極的な生きがいを高めるため始められたもので、各町村の老人クラブに所属する六十歳以上の方が、できるだけたくさん参加できるよう種目も工夫されており、当日は、九種目にわたって町村別対抗戦が繰り広げられ、若いもんには負けてはおられん！とハッスルしたプレーや、珍プレーに、館内は終始、笑いと歓声につつまれ結果は弥彦村が優勝をかざり、年一回のスポーツの日を思う存分楽しんでいました。

力強く選手宣誓をする野崎佐五郎さん

（第三種郵便物認可）



▶めずらしそうに
浄水場を上から見学する児童たち

ワァー〝水〟ってこんなしてできるんか！

十月二日、黒鳥小学校の児童、三・四年生が、新装なった浄水場の見学に訪れ、中ノ口川から取り入れられた〝水〟が、どんな過程を経て、私たちの蛇口から飲み水として出てくるのか、など、係員の説明を真剣に聞いていました。

今回は改築後〝初めての見学者でもあることから、鉛筆のおみやげつきのサービスに、子どもたちはうれしそうに、リュックサックの中にしまっていました。

浄水場を見学して

黒鳥小4年　小林　登希子

十月二日、遠足で、浄水場にいきました。

わたしは、はじめて浄水場にいったので、こわかったです。いちばんこわかったのは、あみみたいになっているはしでした。また、中の口川から取り入れた水は、いっぺんできれいになるのかと思ったけれど、何回も薬をいれたりしてやっときれいになることがわかりました。

ていでんのときでもきかいがまわるので、びっくりしました。お正月でも、おぼんのときでも毎日休まないで仕事をしている人たちがいてくださることで、私たちやまちの人たちみんながおいしい、きれいな水をのむことができるのだと思うとその人たちにかんしゃしたい気持でいっぱいです。

たてものも大きくりっぱになりました。

帰りに、できたてのおいしい水を、すいとういっぱいにもらって帰りました。

私も参加　米一粒から

先日お茶屋さんへ行った所、お茶で御飯を食べさせてもらっているのだから、お茶を取り扱う所はいつも清潔にしておいて、お茶っ葉一っ葉でも大切にし、無駄にしないで売り物にします。という事を拝聴し、この地へ嫁いで来る時、母から田舎へ行くのだから米一粒でも無駄にしてくれるな、流しの所に米粒を残しておくのは、一番見苦しいので決してしないように、との注意のあった事を思い起こしました。

その当時婚約を済ませたばかりの、雲の上を歩いているような有頂天の私には、母の言う事など耳の外のものでした。実際高をくくっておりました。その矢先、本家に祝い事があり、手伝いに来ていた人が、ごはんだらけの釜を水道で洗うのを見て、頭の隅にあった母の言葉が、自分なりに都合良く、消え去って行ってしまったのです。それから最近迄、それらの言葉は私の頭の中で眠り続けていたのです。

考えてみれば、全食糧の基盤となす米、それは我々の唯一の糧であり、一番大切なものであります。一番大切なものであるから、大切に扱うのはごく当然であり得なければいけないのではないでしょうか。

特にこの地の人々にとっては、先祖代々から、それはそれは尊い生活の収入源であったに他ならないのです。その分家の我々にとっても、どれだけ米一粒の恩恵を現在でも、受け続けているかは計り知れないものです。それを母は先見の明で、見抜いていたのだと思わされます。

現在釜の中の御飯を、もったいない・いと、いとおしげにしょう油をかけて食べる時、捨てる事が美徳とされているような反面、省エネとか物の再生とかで生活防衛が唱和されている昨今において、このお年寄りの使いがちなもったいない・いは、物を大切にする心の現われであるから、大変美しい味を響きをもった言葉に聞こえてくるのです。

親の意見と冷や酒は後から効くの教え通り、米一粒から、今は亡き母が子の幸せをどれだけ切に願っていたかを今更ながらに思い、草敬し感謝すると共にそれをケースバイケースで色々な所に多様化し、生活の中に浸透させて行かなければと、母を偲びながら思う今日この頃です。

黒鳥　大橋京子　主婦

「心配ごと相談」毎週土曜午後１時から役場第１委員会室で